

フォルスト・カイゼル2

燈月雪花

彼女は魔王と呼ばれていた。

男の話はそんな言葉から始まった。

正確には、彼女は魔王ではなかった。しかし、魔族と心を通わせる、寒気がするほどの美貌の女性。村人は何処からかやってきた彼女を恐れ、決して村に入れようとしなかった。彼女も人を信用しておらず、人目を避けられる場所に居を構えようと村から立ち去ろうとした。

彼女が男と出会ったのは、そんな時だった。

「出立は日の出前。見送りは無い」
「わかってます」

村長の言葉に少女は簡潔に言葉を返した。机の上のランプ以外に明かりの無い、薄暗い部屋。それでも少女にとっては大切な我が家だった。小さなキッチン、ごちゃごちゃとした寝室。本で溢れ返った父の書齋。それら全てが愛おしくて堪らない。

しかし、旅立ちは目の前に迫ってきていた。

「とーさんのお墓は」

「彼は、この村にとつて恩人だ。我々が世話をしよう」

「できれば、かーさんのお墓いできませんか」

村長の返事が返らない。少女はため息をつきたい気持ちでテーブルの上に広げた物を眺めた。小振りのナイフ。女子供でも扱える、軽くて細い剣。皮をなめして作った防具。一週間分の食糧に、薬草や包帯。火打ち石などの細々とした物。少女が持っていていける物はそれだけだった。

「……心得た」

ようやく、返された言葉に少々驚き、安心した。それならいい。これでもう、心残りは無い。少女は目を閉じた。

「我々を憎んでいるか。メリア」

村長の静かな声に、少女は目を開いた。柔らかい色の明かり。思いつくことは出来ないだろうし、誰もそれを望みはしない。振り向き、暗闇に立ち尽くす村長を見つめて少女。メリアは、はつきりと言った。

「憎んでません。でも、貴方たちのことは嫌い」

ランプの油の焦げる匂いがした。

「貴方たちなんて、嫌い」

村の北西に広がる広大な森。半島から大陸に繋がる大地を区切るように連なる山脈の麓に鬱蒼と茂るそれは深く、抜けるのに休まず歩いて二日はかかるという。その上ここは魔族が多く生息する、いわゆる魔窟。護衛をつけ、開かれた道を走る馬車ならともかく、一步その樹海に足を踏み入れれば生きて帰る事はできない。それが年齢十六の少女ならばなおさら。

地図を眺め、メリアは空を見上げた。木々に遮られてはいるものの、視界に入る空は青い。快晴だ。遠くで鳥の高く鳴く声が聞こえる。魔族の中には鳥と似た姿のものもいるというが、メリアはあの声に聞き覚えがあった。村の近くにもいた、ごく普通の鳥だ。魔族の巣窟であると散々に言われていた森ではあるが、こうしてみると平和なものである。魔族にも遭遇していないし、この調子なら問題なく抜けられそうだ。数時間前までは、そう思っていたのだが。

空から視線を前に戻す。振り向いて、右左を見て。広がるのはどこまでも続く森の風景。木々が連なり、ぼかりと空いた空間には背の低い木や草が生い茂る。三百六十度、同じ風景。最後に手に持った地図を見て、メリアはようやく口にした。

「……勇者は迷子になった」
声に出すと空しいものである。北風でも吹き荒びそう

だ。今の季節は春なので吹きはしないが。

えーと、とメリアは額に指をあて、この森に入ってから自分の行動を振り返ってみる。えいえいおー、と腕を振り上げて突入したのが確か昨日のお昼頃。コンパスで位置を確認しながら歩いたのは小一時間ほどで、その後は川沿いに歩き、茂みに邪魔されて川から離れたのがっかりした頃に日が暮れて、それで一日目はそこで野宿。今朝は朝食のあと出立しようとしたらノウサギを発見して、捕まえようと大追跡をした。その途中で何度か転んだような。

「ああ、あの時かあ！」

コンパスが行方不明になった原因がわかった、あーすつきり。なんて言ったところで事態は何も解決しない。結局ノウサギは捕まえられず、しょんぼり歩いてそついえばここはどの辺りだろうと地図を取り出し今に至る。

「いや、でもさ。位置がはつきりしなくても案外平気だよ。大体の方向は太陽見ればわかるし、北に進めばいずれ山にぶつかるもん。うん、平気平気！」

全て声に出しているのは静かなこの空間が嫌だからだ。黙ったまま森の音を背景に悩むと滅入ってしまう。声に出したら声に出したで痛々しいのだが。

「そうしたら山を越えて、町に行こう。そんで更に北に行けば、確か王都に向かう馬車が出る町があるはずだから、そこからは馬車に乗ろうつと。お金が足りな

「つたらお仕事探せばいいし、今の季節なら交通の便が止まつてるなんて事はないはずだから、うまくすれば今度の冬までには王都に行けるかも」

地図をみながら今後の事を考えて、メリアは微笑んだ。王都はメリアの父の生まれ故郷でもある。そこには一体何があるのだろう。本でしか見たことのない町並みや人で賑わう市場が見られるかもしれない。城は高く、都のどこからでも見えるのだと父は言っていた。お城が、見てみたいなあ。うつとりと呟いた小さい頃の夢が叶うのだ。悲観することなんて何も無い。それに、そこまで行けばメリアの事を知る者なんて誰もいないだろう。

魔王の娘だなんて言つて、化け物扱いする人間は一人だつていないに違いない。

遠巻きに自分を眺め、距離を置き続けた村人たちを思い出して、次いで父を思い出した。王都から研究の為に移住してきた植物学者。最先端の知識や薬などを村に持ち込んだ父は、辺境に住む村人たちにとって恩人であり英雄だった。そんな父の娘だったから、メリアはこの年まで村にいられた。そうでなければとうの昔にこの森に追い立てられていただろう。

父は優しい人であった。そして博識でもあった。この森に入つて以来、いまだ魔族に襲われていないのも、もしかしたら父のお陰かも知れない。

魔族に敵意を向けてはいけないよ。彼らは自分に

害を成そうとするものを襲うんだ。こちらから友好的に接しようとするれば、案外襲われないものさ。

森はのどかだ。獣の唸りも叫び声も聞こえない。魔族なんて言つてるけど、要は野生動物みたいなもんさ。たまに火を吐いたりカマイタチを起こしたりするだけで。ずっとそう考えてきたメリアだから、襲われずに済んでいるのだろうか。

「ま、いつか。とにかく北だ北！」

ゴーゴーと気合を入れなおして歩き出す。どうせ帰れない。なら、二度と帰れない程遠くに行つてしまえばいいんだ。鼻歌を歌いながら、メリアは足もとの小石を力いっぱい蹴つ飛ばした。

落石事故だった。隣の村との間にある山は薬草が多く茂る代わりに崩れやすく、危険な場所でもあった。豪雨の降る日に父がそんなところに行つたのは、村の子どもが病に苦しんでいたからだ。それに、その薬草は父にしか見わけがつかない。ひどく重い病気なんだ。でも薬さえ飲めば一発さ。気を付けてと何度も念を押したメリアの頭を撫でて父は出かけて行つた。

帰つてきたぞ、と村人の声が聞こえたのは雨も上がり清々しい空気の流れる翌朝で、大慌てで家から飛び出し

たメリアの前には、薬草を手にした父の遺体が横たえられた。

森で馬車が襲われたという噂がメリアの耳に入ったのはそれから二か月が経った頃だった。どうやらあの森には魔王がいるらしい。その魔王が非常に凶暴な魔物を引き連れ、人間を襲おうとしているのだ。そんな事があちこちで囁かれた頃にメリアは村長に呼び出された。近隣の村で話し合いがもたれ、そこで魔王討伐の話が出たらしい。

「なんで、その話を私にするんですか」

村長を始めとした大人数名に囲まれ、メリアは足もとに視線をやったまぼつりと尋ねた。居心地の悪い静寂が流れる。ランプの明かりがわずかに音を立て、揺らめいた。きし、という椅子の軋む音。動くに動けない、そんな空気の中、絞り出すように村長の声が出た。

「お前に行ってもらいたい」

返答を返さないメリアに、言葉が重ねられる。

「お前は魔王の娘だ。普通の人間とは違う。ならば、魔王にも対抗できるだろうと」

「かーさんは魔王じゃ」

「わかっている。だが、お前もお前の母も魔物に襲われない。それはやはり、お前たちに何か特殊な力があるためだと我々は考えている。その力を、是非かして欲しいのだ」

まだ幼い頃。母が生きていた頃だ。メリアは両親と共に村の外で遊ぶことが多かった。村の外は魔族が時折出没するので危険だと言われているが、メリアは襲われた事は一度も無かった。むしろ親しくしていたのではないかと今は思っている。その頃の記憶はほとんどないが、たった一つ、覚えている光景があった。

顔も忘れてしまった母が、大の大人を一飲みにつきその鼻面を撫でている。メリアを抱いた父がすごいなあ、と声をあげる。それを聞いて、母は手招きするのだ。怖いことなど何もないのよ、いらっしやいな。

「成功すれば、お前は勇者だ。この村だけでない。近隣の村に住む何十、いや何百もの人間の命を救うことになるのだ。それがどんなに名譽なことが。引き受けてはくれまいか」

気づけば村長は黙り、他の大人達が口々に何か述べていた。勇者。聞こえた言葉に自嘲したくなる。

魔王の娘と呼ばれた子どもを勇者に仕立てるなんて。

「行きます」

ざわめいていた部屋が静まり返る。再び落ちた沈黙に他の何かが混ざる前にメリアはもう一度繰り返した。

「私、行きます」

行けばいいんですよ。投げやりな言葉は呑み込んだ。安堵したため息を吐く大人達。その中で、村長だけがまだ気を緩める気配がなかった。

「では、一刻も早く出立を」
「いや」

揚々と上げられた声を制して村長が口を開いた。

「もう冬だ。直に雪も降るだろう。その中を旅するのはあまりに酷というもの。冬の間は森に入るものもいない。家畜を狙う魔物の心配もあるが、急いで事は仕損じる。春を待とう」

のろりと顔を上げる。しかし、と声を上げるのを目で制すると、村長はメリアを見た。その目が語る。これが最後の情けだと。

「春が来たら立つてもらおう。いいな」

はい、と力なく呟いたメリアを彼はどう思ったのだろう。メリアは家の外を思った。もうすぐ雪が降る。父と母の墓にも積もってしまうだろう。けれど少なくとも、この冬は面倒を見てあげられる。明日になったら墓に供える花を探そうと考えた。一輪くらい、どうにか見つけられるだろう。

がさがさこそこそ。布の擦れる音がする。それは、結構間近で聞こえるような気が。なんだろうと思いつつ、メリアはうつすらと目を開けた。周囲はもう明るい。頬に触れる空気はまだ冷たいけれど、じきに暖かくなるは

ずだ。ああ、その前に火を起こして食事をしなければ。朝食を食べないことには一日が始まらない。昨日は結局何も捕まえられなかったから、村から持ってきたパンと干し肉ぐらいしかなければ。今の季節はまだ木の実は望めないから贅沢は言えない。そんな事を考えている間にもがさがさという音は止まない。重くて仕方ない脛をえいやと気合で押し上げて、メリアは首を動かした。

頭上、手を伸ばせば届く位置に置いておいたカバンがもぞりと動く。なんでカバンが動くんだろうとぼんやり眺めている先で、革製の蓋が持ち上がり、その下から何か覗いた。尖った、トカゲの尻尾のようなそれは右に一回、左に一回動くたびん、と垂直に立つ。と、同時にカバンの中に隠れていた部分が顔を出した。ぶんぶんと頭を振って、ようやく引つ張り出すことに成功した干し肉をカバンの上に乗せる。嬉しそうに尻尾を振りながら匂いを確かめて、ようやくいただきまーすと言わんばかりに食いついた。その顔と寝惚け頭のメリアの目が合った。

まず、全身は茶色。瞬きする目は赤く、腹の部分は白っぽい。ぶくりとした、ついたら柔らかそうな胴体に短くて不格好な手足が計四本。背中にはコウモリのような翼が一对あるが、どう見ても体の大きさと釣り合わない。あんなんで飛べるんだらうかこの子は。大きさは両手で鷲掴みにできるくらいで、それでも一心肉食らしく、

肉に食い込む歯は白くて鋭そうだ。

メリアの結論 多分これはドラゴンっていうやつだろう。干し肉の匂いでも釣られたのかな。

「……ってそれ私の朝ごはんー！」

覚醒したと同時にメリアが絶叫すると、ドラゴンは文字通り飛び上がって逃げ出した。いや、逃げ出そうとした。ドラゴンは先ほどまで漁っていたメリアのカバンの紐に見事蹴躓き、地面に突撃するはめとなった。めげずにどうにか逃げ出そうとするのだが、暴れば暴れるほど紐がぐるぐると巻きついていく。一体どれだけ不器用なのか。メリアがあっけにとられて眺めている間にドラゴンは身動きすら取れなくなり、ぴいぴいと泣きだした。本当に泣いたのだ。赤い目からぼろぼろと涙が零れている。うわー、魔族って泣くんか。メリアはそんな事を考えてから、ようやく助けるという事を思いついた。のんきに眺めていたら可哀想だろう。くるまっていた毛布から抜け出し、メリアはカバンの紐を掴む。するとドラゴンは更に恐慌し、激しく暴れだした。

「大丈夫だって怒ってないから。助けてあげるから暴れないの」

言っただけのものか不安だったが、ドラゴンはひとまず暴れるのを止め、そろりとメリアを見上げた。わかりやすくびくびくと身体を震わせるこのドラゴンがやたら可愛く見えて、メリアは軽く吹き出した。

「じつとしてるんだよー。よい、せつと」

どういふ暴れ方をしたのか、できていた結び目が解けて紐が地面に落ちる。自分の周りに落ちた紐をくるりと見回した後、ドラゴンはメリアを見上げた。ぱちぱちと瞬きする様も首を傾げる仕草も可愛い。

「はい脱出ー。おめでとー」

メリアが手を伸ばして頭を撫でて、ドラゴンは逃げようとしないうちに、噛みついていたりといった様子もない。大人しい性格なのだろう。最初に会った魔族がこの程度でよかつたと、メリアは胸を撫で下ろした。

「泥棒しようとするからこんな目に遭うんだよ。反省しなさい」

うりうり、なんて言いながら頬の辺りを両側から挟むとドラゴンは短い手足をばたばた動かした。やめる、という事だろうか。メリアがじゃあ引張っちゃえなんて片側の頬を掴まんだとき、きゆるきゆるという音がドラゴンから聞こえた。正確にはドラゴンの、ぶにぶにした白い腹から。

「あつはは、お腹空いてんだ」

恥ずかしい、という感情が魔族にあるのかは知らないが、ドラゴンはまるで怒っているかのように暴れて抵抗する。面白がつて腹も突いてやろうとした時に、きゆるきゆるとまた聞こえた。今度はメリアの腹から。

びたりと動くのを止め、お互いに互いの顔を見る。数

回瞬きした後、メリアはへらりと笑って見せた。

「私も朝ごはんまだだったりして」

何せ今起きたところだし。メリアはドラゴンを解放するとカバンを手に取った。

「一緒に食べる？ ごちそうしてあげるよ」

それを聞くとドラゴンはぴんと尻尾を立てて、それから右に左にと忙しく振った。それが家の近所にいた犬を思い出させて、メリアはまた吹き出した。

雲の流れを目で追う。天気を読むことは生活していくうえで重要なことだ。空気の匂いを嗅いで、湿気を感じないのを確かめる。耳をそばだてても不穏な音は聞こえない。何事もない、いい日だ。長い被毛の大きな獣は空に向けていた顔を背後に回した。あまり深くない洞窟から足音がしたからだ。やがて現れた黒髪の青年は、いつも通りの無表情で周囲を見回した。

「いかがされました」

獣が尋ねると、青年はああと短く声を洩らした後、肩に流れてくる髪を手で梳いて背中に流した。

「声が聞こえた」

「人間が入ってきたのですか」

「そのはずなんだが」

青年はどうも腑に落ちない、という表情をしている。

彼がこんな顔をするのは珍しい。何か異常があったのだろうか。獣は青年の元に歩み寄った。

「何か」

「相当追い詰められていると思ったんだが、すぐに聞こえなくなつた」

「もしや、仕留められたのでは」

「いや、死んではいない」

青年は、風を受けながら森を睨んだ。それは数秒の事で、何も言わないまま歩き出す。それに獣はやはり無言のままついていった。

熱いよ、と言ったにも関わらず、ドラゴンは炙つた干し肉で舌を火傷した。器に水を注いで渡すと、せつせと水に顔を付けている。熱気で顔も熱いのか。メリアはそれを声を立てて笑いながら見ていた。

「いいなあ、こういうの久し振り」

ひとしきり笑つた後、メリアが呟いた言葉にドラゴンは水浸しの頭を傾けた。

「とーさんが少し前に死んじゃつたからね。誰かと一緒にご飯食べるの、何か月ぶりかなあ」

布で顔を拭いてやりながら話す。言葉を話しながら食

事をする日が、また来るだなんて。口の端を擦ると、ドラゴンがぴい、と小さな声で鳴いた。

「友達？ いないよ。村の人はみんな、私の事嫌いだったから」

はい、これで綺麗、と手を離す。ドラゴンは前脚で鼻の辺りをちよつと掻いた後、ぱちりと赤い目を瞬かせた。炙った肉からはまだじりじりと音がする。食べられるようになるには、もうちよつとかかるだろう。

「面白いこと教えてあげよつか。私のかーさんね、魔王って呼ばれてたんだよ」

自分の分の干し肉を刺した枝をくるりと回転させてメリアは笑った。

「って言つても、ちよつと違ったんだけどね。本当はね、かーさんは魔王じゃなくて、魔王の子孫だったんだって」

ドラゴンは瞬きを繰り返す。大人しく座っていると、まるでメリアの話を実剣に聞いてくれているように見える。村には、メリアの話を知っている人なんていなかったのに。

「おじいちゃんか、その上？ とにかく魔王になった人間の血を継いでたんだって。ほら、魔王って言つても魔力がある以外は普通の人間でしょ。普通に子ども作れたんだねえ」

魔王は人間である。この事実を認める人間は少ない。

人型の魔族など存在しないというのに、あれは魔物だとほとんどの人間が魔王を敵視する。違うのにね。父はそう言つて寂しそうな顔をしていた。

「魔力は遺伝しないですよ。でも、何も無いって事もなかったみたい。かーさんは魔族から好かれてた」

ドラゴンが首を傾げた。それを見て、メリアは笑いながら水の入った器を手を取った。

「私は何も無いよ。段々薄くなるんだろうね。かーさんまでだったみたい。かーさんも、なんとなく魔族の気持ちかわかる気がするだけだったらしいし」

それでも、ただそれだけの事で母は恐れられた。誰もがあれは魔王だと呼んで、迫害した。

「結局、誰も知らなかったんだね。魔王がどんなものか、っていうの。それなのに」

ぱち、と肉が弾ける音がした。端が少し焦げている。焼き過ぎてしまったらしい。あ、しまったと呟いてメリアは慌てて干し肉を火から遠ざけた。見ればドラゴンの分の肉も冷めてきたようだ。これくらいなら火傷することもないだろう。

「そろそろいい感じだし、食べよつか」

じいとメリアを見つめていたドラゴンに肉を振って見せる。その途端、ドラゴンは目を爛々と輝かせた。ようやく朝食、とメリアは干し肉に齧り付こうとした。

メリアがそれに気付いたのはちょうどその時だった。

なにかいる。しかも、すごく大きいのが。みしりと地を踏む音。ぐぐぐと木の間から伸びてきたのは、サーモンピンクの嘴に濃い茶色の羽毛の生えた顔。鳥だ。目の大きさがメリアの手よりも確実に大きい、そんな鳥の頭が、森の中から生えていた。いや、胴体はあるはずだ。ただ木が邪魔して見えないだけなんだ、それくらい遠くにあるだけなんだ。メリアは目の前に現れた本日二匹目の魔族に凍りついた。怖がるな、怖がるな。手を振り上げてはいけない。父の言葉を自分に言い聞かせ続けるメリアをよそに、その魔族は大きな目を二度、三度と瞬きさせた。おそらく、焼いた肉の匂いが気になるのだろう。

メリアの持つ肉に顔を寄せて目を細める。もったりとした動きを見て、メリアはようやくおそるおそる声をかけた。みた。

「……食べる？」

嘴の先に肉を差し出すと、魔族は嘴を開いて、灰色の舌で肉ごとメリアの手を舐めた。うわーどきどきする、などと考えながらメリアが嘴を覗き込んだその瞬間、魔族の目がくると動いてメリアを捕らえ、そして。

「ひぎゃあああああああ！」

メリアの絶叫が響いた。

魔族はなぜか差し出した肉ではなく、覗き込んできたメリアの頭をがっぷりと銜えたのだ。メリアとしてはたまったものではない。食べられる！ 朝ごはん食べてな

いのにああそうか私が朝ごはんになるのか、そんなの嫌だー！ ともがいているとぱかっと嘴が開き、メリアの頭は無傷で解放された。甘噛みだったのだから、多少痛みが怪我はしていないし、頭も無事、胴体の上に鎮座している。

「はあ、はあ、た、助かった」

涙目で胸を押さえて座り込む。おそらく寿命が五年は縮んだ。ああどうしよう私長生きするつもりなのに。駆け足する心臓を宥めようと息を吸った瞬間、今度は旋毛あたりがごり、と音を立てた。

「い、痛、え、痛い？」

頭のとっぺんに手をやってみる。癖のある猫っ毛に触れるはずの手は、なぜかがざりとした硬いものに触れた。これはまさかもしや。いや、でもだってなんか頭の後ろの方から湿った空気が吹いてくるし。そうしているうちに頭に触れていた硬いものの感触がなくなっただけで、メリアはおそるおそる振り向いてみた。そこにあっただのはぱっかりと広がった嘴と大きな灰色の舌。

「うぎゃあああああもっ」

叫んでいる途中で今度は顔面から銜えられた。その後何をしてもなく解放し、またメリアの頭を銜える。つまり、これは食べようとしているのではなく、遊んでいるのだ。多分。けれど、なにしろ相手は人間の頭をぱっくり銜えられるほどの大きな魔族。力が違い過ぎる。向

こっちは甘噛みのつもりでも、こちらはかなり痛い。心臓にだって悪い。とりあえず本人に向かつて痛い止めてと言ってみたが、聞く気はまったく無さそうだ。ならばとドラゴンの姿を探してみると肉をせつせと齧っている最中だった。

「あ、ずるい！ 卑怯者、はくじょーもがっ」

抗議の声も頭からがっぶりやられて途中でとんでしまう。このまま小突きまわされたら、疲労かストレスで死ぬのではないだろうか。

「ちよ、ほんと待って、痛い痛いの！ 痛いからやめて」と言っても当の魔族はどこ吹く風。どんとぶつかった嘴に押されてメリアは地面に引っくり返った。しまったと思っただけには既に遅く、逃げようにも逃げられなくなっていた。

「きやああまずいまずい、誰かーっ、助けてー！」

どうにか身体を反転させてうつ伏せになり、匍匐前進で逃げようと前方に顔を向け、メリアはそれに気付いた。足。靴。人間の足だ。ここは、人が近付かない魔物の森なのに。ゆるゆると視線を上げていく。黒い生地のおだらりと下がった両腕。隣には人間よりも大きな狼のような獣がいる。額にある三本の角を見るに、これもやはり魔族なのだろう。更に視線を上げ、ぶつかった。ばさりと長い黒髪の間からこちらを見ている目。左目の下に、小さく筆で描いたような模様が入っている。

息を呑んだのはその容貌だけが原因ではない。纏う空気風景に溶け込むように、ひどく静かにそこに存在する、この雰囲気。メリアは喉を鳴らした。

確信した。彼がそうなのだ。

突然変異によって生まれる、尋常ならざる魔力を持つ人間。その力故に、魔族の王として君臨する者。

これが、本物の魔王だ。

何か声をかけようとメリアが口を開いた途端、再び後頭部に衝撃が走った。

「あいたーっ！」

そうだ、一瞬忘れかけたけれど、自分は今魔族に遊ばれている真つ最中だったのだ。どうにか逃げなければと考え辺りを見回し、目に入ったのは魔王と思しき青年と本日遭遇三匹目の魔族。

「た、助けてー！」

嘴を開いて楽しそうに迫ってくる魔族を両手で防ぎながらメリアは青年に向かつて叫んだ。青年は無表情のまま立ち尽くしている。

「魔族の王様なら魔族も言うこと聞くでしょ！ 助けてほんと痛いの！ やめてって伝えてよー！」

必死に訴えているのに、青年はびくりとも動かない。助けを求める手を間違えたか。いや、間違えているのは確実なのだ。けれど、他にいないのだから仕方ない。魔族と必死で力比べをしているメリアの見えない角度で、

青年が一步足を踏み出した。鳥の姿の魔族が反応し、動きを止める。それに気付いたメリアはおや、と考え青年の方へ目を向けた。青年は表情を少しも動かさないまま、口を開いた。

「……やめろ」

その一言だけしか発さなかったが、それだけで鳥の姿の魔族はメリアで遊ぶのを止め、森の奥へと姿を消した。それを見送った後、メリアは改めて青年を見た。黒い髪に黒い服。髪の間隙から覗く目も黒い。ただし、その髪が問題で。

「毛の塊？」

前髪が長過ぎるのだ。顔を覆い、それだけでは足りないとはかりにすぎる。前から見ても後ろから見ても、まったく同じに見える。どうにか覗く目で判断するしかない。思わず思った事を口走ったメリアを魔王は一瞥し、くるりと踵を返した。

「あ、待って」

背中を向けたのを見た瞬間、メリアは呼び止めた。しかし、魔王は一切取り合わず歩いて行ってしまつた。

「待っててば。ねえちよっと」

立ち上がり追い掛けようとする、狼の姿をした魔族が間に入り牙を剥いた。

「失せる小娘。八つ裂きにされたいか」

聞こえた言葉にメリアは目を見開いた。今の言葉は、

目の前のこの魔族から聞こえてきたのか。父に聞いた事がある。魔族の中には知能が発達し、人間の言葉を理解するだけでなく自ら話すものもいるのだそうだ。それら際立つて知能の発達した魔族を、魔獣と呼び区別するのだと。

「うわ、魔獣だ！ すっごい初めて見た」

触れてみようかと手を伸ばす。長い毛は柔らかさそうで、撫でたら気持ちいいだろう。しかし、手はその毛並みに触れる前に鋭い痛みで引つ込めるはめになった。

「失せろと言っている。死にたいか」

手の甲から血がじわりと浮きだして指へ向かって流れていく。鋭い爪は深くメリアの手の甲を抉ったらしい。ずきずきと痛む右手を左手で庇いながら、メリアは魔獣に話しかけた。

「変なことしないよ。ちよっと触らせて欲しいなって。

あと、話してみたくて」

「人間の言う事を信じると思ったか？ 失せる。次は無

い」
魔獣の尾がゆらりと揺れる。全身の毛が逆立ち、身体が大きさを強調する。明らかな威嚇に、流石に黙るしかなく、メリアは悩んだ。どうしよう。でも、話してみたい。

だって彼は、本物の魔王なのだ。

「ジルバ」

緊張した空気の外から声がかげられた。発したのは、こちらに背を向けていたはずの魔王だ。ジルバと呼ばれた魔獣がそちらを意識する。

「放っておけ」

魔王はメリアの足元を見ていた。ドラゴンがメリアの足に縋りつき、怯えた目でジルバを見ていたのだ。ジルバも魔王にならってそれを一瞥し、苦々しい顔をした後、威嚇を止めた。ほう、とメリアは息をついた後、足元のドラゴンにありがと、と小さく礼を言った。おそらく、このドラゴンがメリアの傍にいるのを見て、無害と判断したのだろう。助かった。メリアは心から安堵した。そうしている隙に、魔王は再びこちらに背を向けて歩き出す。今度はジルバもそれについていくのを見てメリアは慌てた。立ち去る気だ。そうはさせるか。急いでカバンと剣を掴み、小さくなつた焚火を踏んで消してドラゴンに声をかけて走り出した。

「ねえ待つて！ 聞きたいことがあるの！」

メリアの言葉に魔王は一切反応しようとしな。ジルバだけが怒つた目をして振り向いた。

「小娘、命拾いしたというのに捨てにきたか」

「捨てないよ。せつかく拾つたんだから有効活用するだけだもん。ねえねえあなた本当に魔王なの？ 本物？」
魔王の隣に並ぼうとするのをジルバが牙を剥き出して威嚇する。ちえ、と口を尖らせながらメリアは魔王を窺

いながら話を続けた。

「あ、まず自己紹介したほうがいいのか。私ね、メリアっていうの。一応これでも勇者でね、魔王討伐してこいつて村から追い出されたの」

そう言った途端、ジルバがかつと目を開いてメリアを睨んだ。これはいけないと、慌ててメリアは顔の前で手を振る。

「やんない、やりません！ やる気ないし、私弱いから無理だし！ 心配いらなから」

ぱた、と音を立てて飛んでいたドラゴンがメリアを抱えているカバンの上に着地した。すっかり懐いてくれたのだと思わずにんまりして、そこでメリアはふと思いついた。自分がこの森に来る事になったそもその原因。「ねえねえ、あのね。村とかで魔王が魔族を率いて襲ってくるって噂が流れてるんだけど、本当？」

今度は、魔王に反応があつた。顔を覆う髪の一房を耳の後ろを通して背中へ流す。片目の分、視界を確保すると目だけでメリアを見た。

「馬車を魔族が襲つたのは本当だよ。なんでそんなことしたの？」

「黙れ小娘。貴様の知つたことでは無いわ」

ジルバが喉から唸り声を発する。魔王は視線をまた前に戻してしまつた。けれど、こちらの話を聞いているのは先ほどの反応でわかつたし、とメリアは話をする相手

をジルバに変えた。

「私無関係じゃないんだよ。それで魔王討伐だー、なんて話になってここに来たんだし」

「人間どもは頭がおかしいようだな。貴様のような無力な小娘を送り込むなどまるで無意味だと言うのに」

鼻で笑うような声にメリアは自分が選ばれた経緯を話そうかどうか考えて、止めた。それこそ無意味だ。

「ねえ、人間嫌い？」

これは、ジルバと魔王両方に向けて尋ねた。ジルバは何をくだらないことを、と呟き、魔王はメリアを一瞥しただけだった。当たり前なのだろう。メリアを見る目は、少なくとも好意のある目ではない。それに、魔族たちの様子を見ればなんとなくわかる。

「魔王の感情つてさ、近くの魔族に影響を与えるんだよね、確か」

ドラゴンは最初、メリアにひどく怯えた。鳥の魔族も、警戒心を隠そうとしなかったし、初めの一撃は様子見のつもりでもあったのだろう。ジルバは一向にメリアに対する警戒を解こうとしない。最終的には個体の感情が優先されるので、今のドラゴンのように懐いてくれるものもいるだろうが、初動で全て決まる。彼らは、人間を敵だと思っているのだ。

メリアの言葉にジルバと魔王が初めて、驚きを表情にして見せた。

「貴様、なぜそれを知っている！」

思っていた以上に鋭い反応をされてメリアはおや、と思っただが、すぐに思いあたった。魔王が魔族に与える影響についてなど、人間の中で知る者がいるとは思っていなかったのだろう。魔王について理解をしようとする人間など、いないと。変なの。同じ人間のことなのに。魔族だって、そこにいるのに。

「とーさんが教えてくれたの。とーさん物知りなんだよ」母親のことについては黙った。それは多分、最終手段だ。最後の最後、もしくはもういいと思った時に話すことなのだろう。

「ねえ、人間嫌い治す気ない？」

今度は何を言い出す、と顔をしかめるジルバをそのままにしてメリアは続けた。

「このまま魔族が人間を襲い続けたらきつと人間も黙ってないと思うの。もつと強い人集めて討伐隊とか作ったりするかも。そうしたら嫌でしょ」

魔王に反応はない。

「だからね、人間を襲うのを止めたらいいと思うの。そうしたら人間だって無闇に魔族を傷つけたりしないと思うよ。人間は魔族を怖がっているし。それでね、魔族が人間を襲わないようにするには、魔王が人間を敵だーって思わなくなればいいんじゃないかなって」話しているうちにメリアは段々、それが名案に思えて

きた。いいかもしれない。それは、できたらいい事なのかもしれない。

とーさんとかーさんに起こったみたいなの、奇跡みたいな素敵なことかもしれない。

「だからね、一緒に暮らそう！」

「はあ？」

返事をしたのはやはりジルバだった。魔王も驚いた顔をしている。口が開いているのが微かに見えた。今まで見てきた中で、一番表情が動いたのを見て、メリアはにんまりと笑った。

「貴様なんのつもりだ！ 魔王と共に暮らすだと。ふざけるな、隙を窺い、寝首をかくつもりか！」

「やりませんって言ったでしょ！。だから、訓練だよ。人間嫌いを治すにはやっぱり人間と付き合ってみるべきだと思っただ。それに私を無力って言ったのはジルバでしょ。心配ないって」

「人間如きが名前を呼ぶな忌々しい！ 馴れ馴れしくするな！」

がおつとジルバは吠える。一方の魔王は驚いた表情でメリアを見たままだ。その黒い目をメリアはまっすぐに見つめる。きれいだ、と思う。静かな黒は、よくよく見れば優しくなるんじゃないかと思えるような柔らかさも持っている気がする。母も、こんな目をしていただろうか。

「ねえ魔王。襲ってきたのをやつつけてもいいかもしれないけれど、あんまりやりたくないな、て思わない？ 痛いのが苦しいのが、そういう思いしなくていい方法があるなら、そっちの方がいいと思わない？」

魔王は辛かったんだろうか。苦しかったり怖い思いをしたのだろうか。なら、それに見合うだけ嬉しかったりするべきだし、もう十分だと思うなら、無闇に傷つくべきじゃない。

「私は魔王を傷付けたりしないよ。やる気もないし、力もないから心配ないでしょ。怖くないでしょ？」

名案だと思った。うまくいけば人間と魔族が争うことがなくなるかもしれない。もしかしたら、仲良くすることだって、できるかもしれない。それに、理由ができる。

私が、いてもいい理由ができる。

「ね、試していいからやってみようよ。絶対危害を加えないって約束するよ。損はないと思うんだ。うまくいったら絶対いいって。だからさ」

最後は、魔王の目を見て言えなかった。

「だから、一緒にいさせてよ」

ドラゴンがぴい、と小さな声で鳴いた。魔族は魔王以外の人間の感情も読み取るのだろうか。寂しそうな目をしていて、無理やり笑って見せた。ジルバの魔王を呼ぶ声がある。判断を仰ごうというのだろうか。

「……放っておけ」

それだけ言うと、魔王はもう見向きもしないで歩いて行った。シルバがそれに続く。なんとなく足を止めてそれを見送ってから、メリアは魔王の言葉を繰り返した。放っておけ。シルバに向かって言った言葉だ。冷たいな、とも思うが。

「これってさ、好きにしるって事かな」

こじつけだけだ。呟くとドラゴンが声を上げた。メリアはドラゴンの顔を見て、今度はちゃんと心から笑った。こじつけでも構わないだろう。前向きに考えないとやってられない。図々しいくらいでないと、居場所なんて作れない。それに、彼らはメリアの話を聞いてくれた。それだけで、頑張ってみる理由にはなる。

よし、と気合を入れてメリアは先に行った彼らを追い掛けた。気になる事もあるし。

「ねえねえ魔王、髪の毛鬱陶しくないの？ 切ってあげるよ。あとそれから名前！ 名前なんていうの」

教えてよー、と背中に向かって叫ぶと、シルバが振り向いてうるさい、と怒鳴った。

彼女は魔王と呼ばれていた。
人間に恐れられ、人間を嫌った彼女だったが、やがて

一人の男と出会い、心を開いた。世界中どこに行こうとも、愛されることはないだろうと思っていた彼女にとって、それはどんな衝撃だったのだろう。知る術など、もどこにもないが。

しかし、証は残っている。

男はそれまで足もとに座っていた少女を膝に抱きあげた。ぱちりと瞬きする少女の丸い瞳を覗き込んで微笑む。

「父さんが、何を言いたいかわかる？」

くるりとした瞳は青空の色。どこまでも広がる、吸い込まれそうな天蓋の色に、男の顔が映り込む。

男が彼女と出会った日も、水のように広がる青空だった。

「わかるかい？ メリア」